

六匹きのうさぎ

昔むかし、ある湖のほとりに椰子みずうみの木の森やしがありました。この森に、うさぎが六匹き住んでいました。

あるとき、椰子の実がひとつ水に落ちて、ボトンと音を立てました。六匹きのうさぎはびっくりしてにげだしました。うさぎたちが走っていくと、きつねに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走ってるの」と、きつねがききました。うさぎたちは、

「あそこで『ボトン』って声が出たんだ」と答えました。それを聞くと、きつねもあわててかけだしました。

うさぎたちときつねが走っていくと、さるに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走ってるの」

「あそこで『ボトン』って声が出たんだ」と、きつねが答えました。それを聞くと、さるもいっしょにかけだしました。

うさぎたちときつねとさるが走っていくと、雌鹿めじかに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走ってるの」

「あそこで『ボトン』って声が出たんだ」と、さるが答えました。そこで、雌鹿もいっしょにかけだしました。

うさぎたちときつねとさると雌鹿が走っていくと、こんどはぶたに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走ってるの」

「あそこで『ボトン』って声が出たんだ」

そこで、ぶたもいっしょにかけだしました。うさぎたちときつねとさると雌鹿とぶたが走っていくと、かもしかに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走ってるの」

「あそこで『ボトン』って声が出たんだ」

かもしかも走りだしました。

こうして、ぞうも、くまも、馬も、とらも、みんなあわてふためいてにげていきました。

山の近くまで来ると、王さまのようなたてがみのライオンに会いました。ライオンは、動物たちが走ってくるのを見ていました。

「おまえたち、どうしてそんなにあわてふためいてにげてるんだ。みんな、強いけづめやきばを持っているじゃないか」

すると、みんなはいいました。

「あそこで『ボトン』って声でしたんです」

ライオンは、

「その『ボトン』っていったのは、いったいなんだね。そいつはどこからやってきたんだね」とききました。みんなは、

「それは知らないんです」と答えました。

「じゃあ、そんなにあわてふためいてにげることはないよ。まあ調べてみようじゃないか。おまえたち、それをだれから聞いたんだね」

ライオンがきくと、みんなは口ぐちにいいました。

「とらです」

「馬です」

「くまです」

「ぞうです」

「かもしかです」

じゅんばんにききただしていくと、しまいにきつねがいました。

「六匹きのうさぎに聞いたんです」

ライオンはうさぎたちに、

「おまえたちがその声を聞いたのかね」とたずねました。

「ええ、ぼくたち、そのおそろしい声をはっきり聞いたんです。こっちです。『ボトン』っていったやつを見てください」

六匹きのうさぎはそういって、ライオンを椰子の木の森までつれていきました。みんなもいっしょにつれてきました。

「ほら、ここで、『ボトン』が聞こえたんです」

うさぎがそういったとたん、椰子の実がまたひとつ落ちてきて、ボトンと水に落ちました。ライオンは、

「なあんだ。あれは椰子の実が水に落ちる音じゃないか。こんなことでおどろくんじやないよ」といいました。

すると、神さまの声が聞こえてきました。

ただのうわさで動くものではない

目をしっかりあけて、自分の目でよく見るのだ

椰子の実が落ちてきただけでも

森じゅうのけものがにげだすこともあるのだから

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話21』小澤俊夫訳／ぎょうせい